

八戸民俗芸能‘えんぶり’囃子の心理学的効果

畑 山 俊 輝¹⁾・金 地 美 知 彦
深 澤 伸 幸

要 旨

本研究は、青森県八戸市における国の重要無形民俗文化財の指定を受けている「八戸えんぶり」お囃子音楽の心理学的効果について明らかにしようとした。そのため、「えんぶり」囃子の音楽により人々が抱くイメージを、心理学的観点から分析した。対象者は、大学生44名（男性33名、女性11名、年齢18歳～21歳）であった。彼らに、イメージを言いあらわす21項目の形容詞語からなる印象評定票を用いて、音楽聴取時にそれぞれの尺度の形容詞語で描かれるイメージの程度を尺度上に記入するよう求めた。「えんぶり」音楽2曲を西洋の古典音楽2曲と比較した。結果は次のようであった。「えんぶり」の曲同士には、印象評価値を基に算出した Spearman の相関係数により極めて高い類似性が見られた。また、「えんぶり」の楽曲1と「Badinerie」と類似性は高く、「えんぶり」の楽曲2と Badinerie とでは、類似する傾向が見られた。「えんぶり」の2楽曲が喚起するイメージとしては、「動的な」、「陽気な」、「にぎやかな」などの形容詞語と関係していた。このことは、伝統的な「えんぶり」のお囃子にポジティブな効果が認められることを示した。

キーワード：八戸えんぶり、音楽印象評価、横笛、祭りの形態

はじめに

青森県八戸市には、重要無形民俗文化財の指定を受けている「八戸えんぶり」²⁾が伝承されて

いる。「八戸えんぶり」は現在、毎年二月十七日から二十日の間に行われる、農業を起源とした伝統的な祭りの一つである。本研究はこの祭りのお囃子の音楽をとおしてその心理学的な効果を検討しようとするものである。文献を探してみても容易にこの種の研究が見つからないことからすると、これまでお囃子の音楽に注目する研究はなされてこなかったように思われる。その理由は伝統的芸能とされる祭りの長い時間の経過の中でさまざまな音楽が生まれ、お囃子音楽の魅力が薄らいだためであろう。しかし、伝統芸能として長年地域に受け容れられてきたこ

八戸大学人間健康学部

¹⁾ 本研究は、一部は八戸大学の平成21年度人間健康学部・共同地域研究プロジェクトへの助成によっている。また本論は、八戸大学人間健康学部の卒業生・内澤康友さんの平成20年度の卒論研究で行われたデータの収集や集計をもとにしていて。記して謝意を表します。

²⁾ 「えんぶり」という行事が、いつのころから行われ、それがどのような推移をへて、現在のように芸能化されたかは定かではない。その起源の伝説については、鎌倉時代の昔、南部の殿様の奥州下向によって始められたとか、義経伝説とかのかわりを取り上げたもの等、数多く残されている。ともかくにも、農民たちが豊作を祈る行事の発生は、米作りが始められた古代とも考えられ、同種の行事や芸能は、全国各地に残されている。寛政六年(1794)、下北半島へやってきた菅江真澄は、その紀行文「奥の手風俗」(おくのでぶり)の中で、正月十五日、田名部家で「杵すり」

を見たことを記録している(正部家種康, 1992)、との指摘によれば、「えんぶり」は江戸時代をとおして定着したものと思われる。なお、明治期以降一時この祭りは行われなくなった時期があったが、昭和に入り復活が図られるに至って(阿部, 2001)地域全体の町おこしの起爆剤としての期待が込められて今日に至っている。

とを併せ考えれば、その魅力は失われたのではなく、むしろ抵抗なく人々の心の中に内潜してきたのではないかと思われる。Stevens & Byron (2009)も、音楽の構成やならわしが暗々裏に理解できるようになるのにはただ特定の音楽的環境に触れるだけでよく、たいていそれは幼児や児童の頃に可能であることを示唆している。そうであれば伝統芸能のお囃子音楽という、一見古風で顧みられることのない音楽であっても、地域の人々にとっては幼い頃から耳にしているなじみの響きとして心にプラスに作用しているものと推定できる。ここでこうしたことを考察するための心理学的検討を加えようとするのが我々の目的である。

この祭りの特徴は、厳しい寒さの真冬に行われることにある。間もなく訪れる暖かい春と、豊作への願いがこの祭りには込められている。阿部 (2001)によれば、民俗芸能「えんぶり」は、春になってまっさきに稲の豊作を前もって祈願する、いわゆる「予祝」の芸能と考えられるという。この祈願のもとになっているのは、冬の間大地に眠っていた、稲などを大きく育てる成長の霊力をゆすぶることに意義を置く思考法である。「えんぶり」の由来となった「えぶり」という農具で土を砕いてかきならしながら田植え前の田を平らにし、大地をゆすぶることに祈りを込めたものと思われる。

古くから、八戸地方は寒冷で土壌も稲作に適している環境にはなかった。この地方を含む南部の国では「冷害・凶作」が三年に一度はやってくるといふ厳しい現実があり、人々は飢饉になやまされなければならなかった(正部家, 1999)。そのために、天候回復や豊作を神々に祈る、さまざまな民間行事や民俗芸能が伝承され、全国各地にいろんな形態のものが今でも伝えられている(正部家, 1992)。「えんぶり」はその一つなのである。大地をかきならしながら霊力を効果的にゆすぶるためにはさまざまな祈りの言葉、詞章が添えられた。それは、田を耕作する有様を始めから終わりまでまね事で見せ、神

様にことしもこのように豊作をお恵みくださいと祈願するなどがその典型であり、それを唄いあげるのにお囃子が大きい役割を果たしたに違いない。「えんぶり」お囃子の楽器編成は、大小二個の締め太鼓(猿樂太鼓)、六孔の横笛、手びらがねの三種類(阿部, 2001)のみであるが、八戸地方えんぶり連合協議会が編集した記念誌(2001)によれば三味線も加えられているので、楽器編成には組による多少の違いはあったものと思われる。いずれにせよ、旋律を奏する主役は横笛である。

笛類の起源は想像が及ばないほど遠い過去に求められる(奥田, 1978)といわれるほど古く、器に開いた穴に息を吹き込んで音を出す“楽器”は人類史の始まりの頃にはすでにあったのかもしれない。そして今日に至るまで笛にはいろいろな意味合いが込められてきたと奥田は述べている。同時に彼は、笛の音がどのようにして人類の関心と呼ぶに至ったかについて興味深い指摘をしている。「吹く」こと、すなわち「息を使う」ことに呪術的な意味合いが認められ、こうして得られる音には腕を動かして弦を振動させたり、物体を叩いて音を得たりする以上におそらく魔力が余計に宿っていると考えられていたとの指摘である。「えんぶり」をはじめとして日本の祭りでは横笛がおそらく例外なく使われている。その理由の一端は奥田の指摘から理解できるように思われる。しかし、横笛は一体いつ頃から使われているのであろうか。横笛がいつどこで使われるようになったのか、その詳細は不明である。前田(2006)によれば、横笛の最古の記録は紀元前9世紀頃の中央アジアで、その後インドや中国で好んで使われ、日本へは奈良時代に渡来人によってもたらされたらしいのである。こうした笛の成り立ちからすれば、江戸時代には横笛が庶民にも使われていて不思議はない。おそらく「えんぶり」のお囃子の旋律を奏するのにその使用の簡便さや呪術的な意味合いからして三味線は中心的な役割を果たすことは出来なかったのであろう。

以上をふまえて、「えんぶり」の音楽が地域の人々にどのような心理的効果を及ぼしているのかを、えんぶり音楽と同時代にあたる1700年代に作られた、西洋の古典音楽とを比較することで検証しようとした。特に、IT化社会に生き、さまざまなジャンルの音楽を容易に手に入れることができるようになった、現代の八戸地域に住む若い世代を対象にすることを試みた。

刺激としての音楽には、ハーブシコードで演奏された、Rameauの雌鳥のほか、「えんぶり」と同じ横笛の、フルートで演奏されたJ.S. BachのBadinerieを使用した。作業仮説としては、「えんぶり」の音楽に対する反応は、普段受容され愛好される音楽ではないにもかかわらず、プラスの評価が認められるであろうということである。

方 法

協力者：八戸大学生44名（男性33名，女性11名，年齢18歳～21歳）が参加した。データ処理の対象となったのはデータの整った42名

であった。

刺激曲目：次の4曲を用いた。そのうちの2曲は「えんぶり」からの曲であり，得られる反応がどの程度一致するかを検討するため2曲とした。4曲に共通しているのはいずれも18世紀の作品と考えられる点である。

1曲目はJean-Philippe Rameau (1683-1764)の雌鳥(La poula)であった。これは新クラヴザン組曲第2集の第5組曲にある5番目の曲で，1728年頃の作品といわれている。選曲の理由は，「えんぶり」囃子の音楽が1700年代の後半には存在したと推定されるので，作曲年が18世紀であり，さらに「えんぶり」で奏される速い曲調に類似していると判断したことによる。

2曲目には，インターネットのウェブサイトからダウンロードした「えんぶり」の曲を配置した。これを「えんぶり」1とした。

3曲目はJ.S. Bach (1685-1750)のBadinerieであった。これは組曲第2番短調7番目の曲で，作曲年は1720年頃と推定されている。この曲が選ばれたのは，作曲年が18世紀であるこ

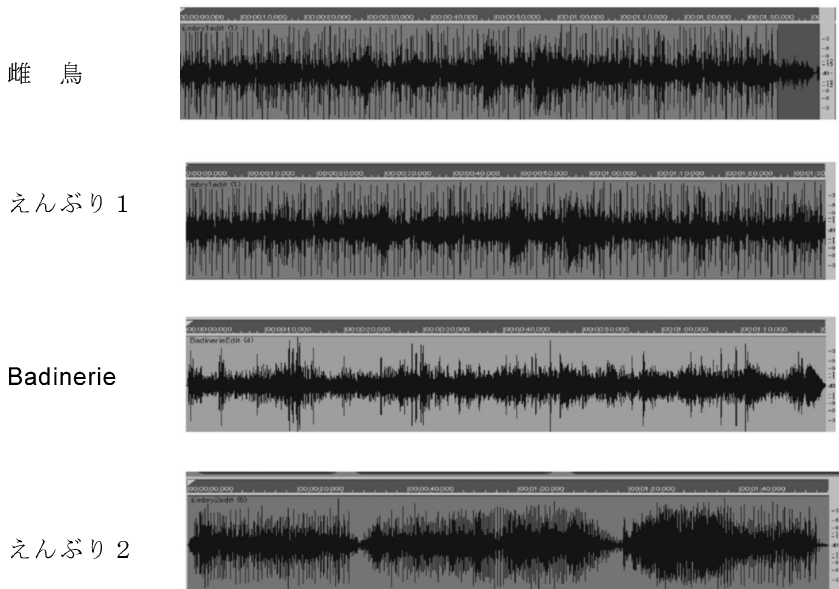


図1. 刺激楽曲の波形

と、「えんぶり」で奏される速い曲調に類似しているだけでなく、使用されている楽器がフルートで「えんぶり」の旋律楽器である横笛と比較できるためである。

4曲目は「えんぶり」の曲で、「えんぶり」2とした。これは、CD版「日本の祭り～北海道 東北編」(King Record 1997 KICH-2043)の8曲目に録音されている「八戸のえんぶり」であった。なお、この録音には解説のための音声部分が組み込まれている。刺激として用いるためその部分を削除・編集した。

以上の4曲をそれぞれ約1.5分間の提示時間になるよう全体を編集し、CD-Rにまとめて録音した。刺激楽曲の刺激波形を図1に示した。

実験用具：参加者からの刺激曲への反応は、イメージ測定尺度へのチェックを求めることによって行った。この尺度は「音楽の印象評価の尺度リスト(七段階評定)」(菅, 1996)全20項目であった。この20尺度の選択に際し仮定されているのは、「明-暗」、「興奮-沈静」、「緊張-弛緩」の3因子である。菅は「好き-嫌い」や「快-不快」の評価性尺度を個人差が大きいことを想定して入れていないが、各曲全体の評価を求める必要から本研究ではあえて「好き-嫌い」の項目を用意した。すなわち、尺度は全体で21項目であった。

刺激曲の提示は八戸大学の講義用教室(831教室)に備え付けの音響装置(KOWA, KSM0801A)を使用して行った。刺激提示には、教室天井の前後に設置されているスピーカー2個を用いた。また、提示直前に参加者に聞きやすい音量を求めるようにした。

手続き：実験者は参加者に対し、実験で用いる印象評価票を配布し次のように教示を行った。

「これから、音楽に関する印象評価を行っていただきます。1ページ目にある、説明と練習用の項目が記されているところを見てください。その後に記入用紙が2枚あります。全てが両面に印刷されていることを確認してください。では

まず、名前と年齢を記入してください。以下には音楽を聴いたときに想い描くイメージを言いあらわす、いくつかの言葉を挙げています。その一つ一つに対応させながら、項目尺度上の適当なところに例に示すように、丸印を付けてください。」

印象評価の本試行に入る直前に記入の仕方を徹底するための練習を行った。それを練習用の音楽(エルガーの威風堂々, 30秒)で行った。「始めます」で音楽を提示した。練習後、刺激曲4曲を一曲目から順番に提示し、曲毎に印象評価票に記入を求めた。各曲とも提示約20秒後、「聴きながら記入を始めて下さい」と伝えた。音楽が終了してから3分ほどの記入時間を設けた。参加者全員の記入が終了したことを確認した後、同じような手順で次の曲目の提示を行った。曲間の時間間隔は約1分であった。各曲とも提示回数は一回であった。なお、教示にあたり楽曲の曲名などの情報については一切与えなかった。

データ処理：得点化するにあたり右極から各評定段階に1～7点の数値を与え、これを粗点とした。菅(1996)は左極から得点化を行っているが、本研究ではポジティブな反応に高い得点を与えるようにするため右極からの得点化を行った。統計処理にはSPSSのバージョン11.0Jを使用した。

結 果

印象評価票を用いてデータ収集を行い、それぞれの平均値、標準偏差、変動係数を曲とその項目ごとに算出した。

1. 楽曲毎の基本統計量

各項目の平均値と標準偏差値を表1に示した。それにもとづいて曲毎の全項目の平均値を図2に示した。また、変動係数を表2に示した。表1から各楽曲の評価結果を見てみると次のようである。

表 1. 印象評価値の平均値と標準偏差値

	楽曲 1		楽曲 2		楽曲 3		楽曲 4	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
項目 1	3.9	1.2	5.5	1.2	5.5	1.2	5.4	1.0
項目 2	4.7	1.3	5.4	1.1	5.7	1.2	5.3	1.2
項目 3	4.0	1.1	5.7	0.9	4.8	1.1	5.8	1.1
項目 4	3.7	1.2	4.9	1.7	4.5	1.2	5.0	1.5
項目 5	3.7	1.0	4.1	0.9	3.3	1.1	4.2	0.9
項目 6	4.5	1.6	5.7	1.2	4.5	1.6	5.8	1.1
項目 7	4.5	1.4	3.4	1.3	5.2	1.1	3.9	1.1
項目 8	4.0	1.4	3.6	1.1	3.5	1.2	3.9	0.9
項目 9	4.4	1.2	5.0	1.4	4.9	1.5	5.0	1.1
項目 10	4.6	1.5	5.9	1.4	5.3	1.3	5.5	1.2
項目 11	4.2	1.3	4.7	1.3	4.1	1.4	5.4	0.9
項目 12	4.5	1.6	6.0	1.0	5.2	1.4	6.0	1.2
項目 13	3.7	1.0	5.1	1.1	4.6	1.1	4.9	1.0
項目 14	4.6	1.3	3.1	1.1	3.9	1.2	4.0	0.9
項目 15	4.8	1.2	4.9	1.2	4.7	1.2	5.2	1.2
項目 16	3.7	1.3	5.6	1.0	4.9	1.3	5.4	1.1
項目 17	3.8	1.4	5.1	1.4	3.3	1.2	5.3	1.0
項目 18	4.0	1.2	5.2	1.2	4.0	1.0	5.1	1.1
項目 19	4.6	1.2	4.5	1.5	4.2	1.4	5.1	1.2
項目 20	4.2	1.2	5.3	1.0	3.8	0.8	5.3	1.1
項目 21	4.0	1.2	4.5	1.3	4.3	1.2	4.4	1.2

楽曲 1: 「雌鳥」 Rameau

楽曲 2: 「えんぶり 1」

楽曲 3: 「Badinerie」 J.S. Bach

楽曲 4: 「えんぶり 2」

注: 項目名は図 2 参照

曲全体として、ネガティブ評価の顕著な項目は認められなかった。次にそれぞれの曲を見てみると以下のような結果が得られた。楽曲 1 は、平均評定値の範囲が最低値 3.7、最高値 4.8 で、段階尺度のほぼ中央の得点を示した。評価尺度「好き-嫌い」の結果は 4.0 であり、楽曲 1 はポジティブでもネガティブでもない評価がなされていた。楽曲 2 に関しては、最低値 3.1、最高値 6.0 で楽曲 1 に比べると変動の幅が大きかった。全 21 項目中 18 項目において 4.0 以上の評価平

均であり、全体としてポジティブな評価がなされた。特に、「動的な」、「陽気な」、「にぎやかな」などの項目得点が高かった。楽曲 3 は、「えんぶり 2 曲」と類似する得点パターンを示した。最低値 3.3、最高値 5.7 の変動幅を示した。ポジティブ評価の高かったのは「明るい」、「軽やかな」、「すんだ」、「陽気な」、「にぎやかな」といった項目であった。楽曲 4 は最低値 3.9、最高値 6.0 であり、全体的に高い評価が与えられた。ポジティブ評価は、楽曲 2 と同様、「動的な」、「陽気な」、「にぎやかな」といった項目で顕著であった。楽曲 2 と楽曲 4 の「えんぶり音楽」と、楽曲 3 「Badinerie」では、「軽やかな」、「陽気な」、「にぎやかな」の項目で同様の評価得点が得られた。このことはこれら 3 曲間には、高い関連が存在すると推定される。

以上の記述は図 2 から確認できた。すなわち、2 つの「えんぶり」の評定値の項目間変動が似ていること、Badinerie は「えんぶり」に似た評価得点を示したことである。以上を確認するために、次には楽曲間の類似性を検定した。

2. 楽曲間の類似性

楽曲 1 と楽曲 2、楽曲 1 と楽曲 3 といったように全ての楽曲を相互に組み合わせ Spearman の相関係数を求めた。表 3 は Spearman の相関係数の行列である。楽曲 2 と楽曲 3 の間には有意な相関が認められた ($r=0.514, p<.05$) ほか、楽曲 2 と楽曲 4 の間にも有意な相関が認められた ($r=0.876, p<.01$)。また、楽曲 3 と楽曲 4 の間には有意傾向が認められた ($r=0.425, p<.1$)。以上から分かるのは、「えんぶり」の 2 曲は高い関連性を有すること、フルートの曲である Badinerie は「えんぶり」と関連性が認められたことである。しかし、ハーブシコードの曲である雌鳥は他のいずれとも関連性を示さなかった。

3. 楽曲間の評価の差異

評価のばらつき具合を推定するために、表 2

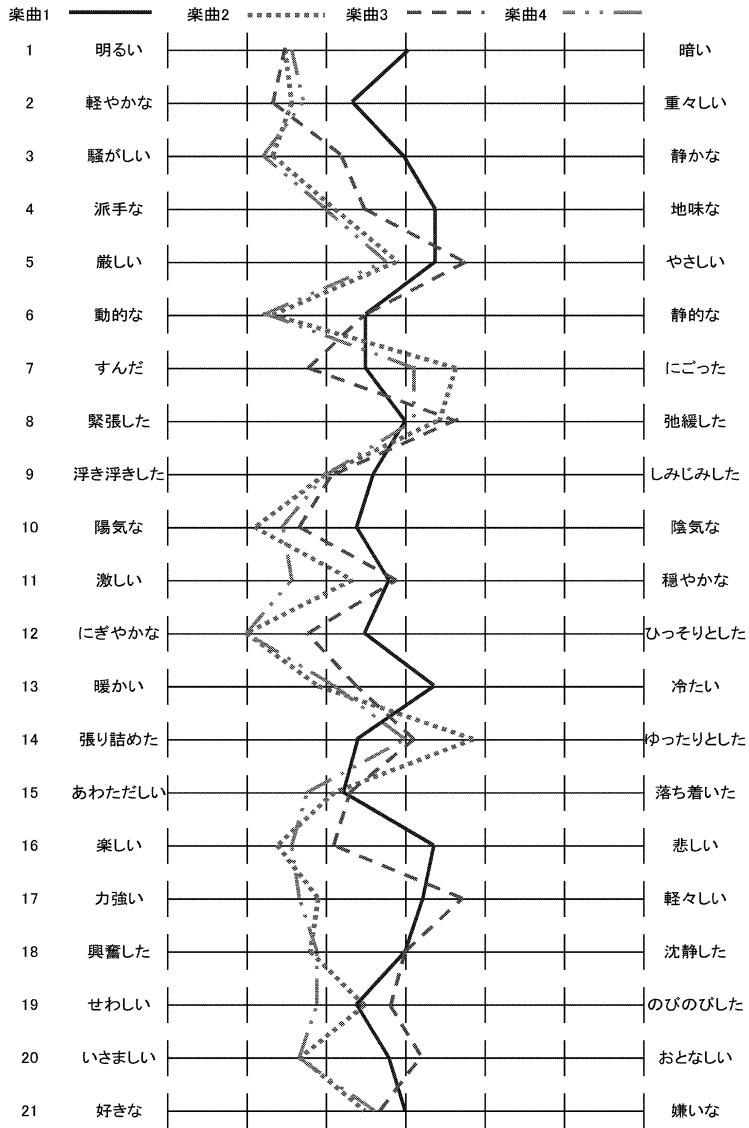


図2. 各曲の項目ごとの平均評定値

の変動係数値を基に、Wilcoxonのノンパラトリック検定を行った。得られたWilcoxonのW値を表4に要約した。楽曲1は他のすべての楽曲と有意に差異があった。楽曲3と楽曲4の間にも有意な差異が認められた。これらの結果は、「えんぶり」の2曲は反応の個人差に違いがないのに対して、楽曲1の雌鳥は、他の3曲とは異なることを示した。また、Badinerieは「えんぶ

り1」とは反応の個人差は異ならなかったが、「えんぶり2」とは違いのあることを示した。

考 察

本研究は、今日では普段顧みられることの少ないお囃子の音楽に注目し、地域の人々にとっては意識化されることなくその響きが快いもの

表2. 印象評価値の変動係数

	楽曲1	楽曲2	楽曲3	楽曲4
項目1	30.5	21.6	21.3	17.9
項目2	27.9	19.7	20.9	22.2
項目3	27.2	15.9	22.6	18.1
項目4	32.4	34.2	27.1	29.0
項目5	27.1	21.6	34.6	20.7
項目6	35.4	20.7	35.8	19.5
項目7	30.2	36.7	21.4	29.1
項目8	34.5	31.1	32.9	22.2
項目9	28.6	28.5	30.0	21.8
項目10	32.8	22.8	25.6	21.9
項目11	30.8	26.8	33.6	16.9
項目12	36.3	16.6	26.3	20.1
項目13	28.4	21.9	24.4	21.2
項目14	28.9	36.9	30.2	23.0
項目15	25.9	23.9	24.9	22.6
項目16	34.1	17.9	26.9	20.1
項目17	35.9	26.7	35.1	19.7
項目18	29.1	22.6	24.5	22.4
項目19	25.9	33.0	33.2	24.1
項目20	27.5	19.7	21.0	21.4
項目21	30.7	27.7	28.9	26.7

楽曲1：「雌鳥」Rameau
 楽曲2：「えんぶり1」
 楽曲3：「Badinerie」J.S. Bach
 楽曲4：「えんぶり2」

表3. Spearman の相関係数

	楽曲1	楽曲2	楽曲3	楽曲4
楽曲1		-0.032	0.252	0.140
楽曲2	-0.032		0.514*	0.876**
楽曲3	0.252	0.514*		0.425 [△]
楽曲4	0.140	0.876**	0.425 [△]	

**： $p < .01$ *： $p < .05$ [△]： $p < .10$

楽曲1：「雌鳥」Rameau
 楽曲2：「えんぶり1」
 楽曲3：「Badinerie」J.S. Bach
 楽曲4：「えんぶり2」

表4. 楽曲間の変動係数の差異

	楽曲1	楽曲2	楽曲3	楽曲4
楽曲1		336.0**	369.5*	251.5**
楽曲2	336.0**		392.5	393.5
楽曲3	369.5*	392.5		307.0**
楽曲4	251.5**	393.5	307.0**	

**： $p < .01$ *： $p < .05$ [△]： $p < .10$

楽曲1：「雌鳥」Rameau
 楽曲2：「えんぶり1」
 楽曲3：「Badinerie」J.S. Bach
 楽曲4：「えんぶり2」

として内潜化しているのではないかと推定し、お囃子音楽のイメージの測定を大学生を対象に試みた。測定には、音楽の印象評定のために21の対照的な形容詞項目を両極とする7段階尺度を用いた。

評価尺度の、得られた基本統計量から示唆されたことは、「えんぶり」の2曲どちらにも、「明るい」、「動的な」、「陽気な」、「にぎやかな」といったポジティブな評価が高いことであった。また、楽曲3のBadinerieの評価値は全体的にポジティブな傾向が認められ、「えんぶり」の楽曲2曲に類似していることであった。これに対して、楽曲1の雌鳥他の3曲と異なり、全体的にはポジティブでもネガティブでもない中間的な評定がなされた。そこで、以上の結果を確認するために各楽曲の印象評価値をさらに分析した。

楽曲間の類似性を検討したところ、楽曲1は他の3曲とは異なること、楽曲2、楽曲3、楽曲4の3曲は相互に類似していること、特に「えんぶり」の2曲間には高い相関が認められたことである。次に、変動係数を基に、楽曲間の評価の仕方のばらつき具合を検討した。結果から、楽曲1は他のどの曲とも異なる評価値の変動があった。平均評定値が楽曲1全体として中間の値を取ったのは、評定の変動が他の楽曲より大きかったことと一部関係しているものと思われる。楽曲毎に全項目の平均変動係数値の平均値

を見ると、楽曲1が30.5、楽曲2が25.1、楽曲3が27.7、楽曲4が21.9であった。この結果からも、評定の仕方が楽曲1は他と異なること、「えんぶり」の曲同志は似ていること、Badinerieは、「えんぶり」と雌鳥の曲との中間にあることが分かった。

楽曲3が、平均評定でも変動係数においても「えんぶり」の2曲に類似していたことは、曲調や使用されている楽器に関係があると考えられる。双方の曲のいずれも、速いテンポの曲であった。また、「えんぶり」では横笛が使用され、楽曲3のBadinerieではフルートが使用されていた。笛の音は歌口でのアンブシュールといわれる、口の形や口腔の大きさ、またタンギングなどによる息の微妙なコントロール、すなわち「吹き方」で変化する。それを駆使したところに笛の独特の響きが生じるわけで、Badinerieと「えんぶり」の曲の間には曲想が大いに違うにもかかわらず共通した心理的特徴が認められることは、笛の音の持つこうした息の業と関係しているのであろう。

さらに、「えんぶり」音楽が与える音楽効果がポジティブであったことは、Stevens & Byron (2009) の指摘を併せ考えれば、それが地域の人々にとって幼い頃から耳にすることによって、お囃子音楽の構成やならわしが暗々裏に脳裏に焼きつく過程で、なじみの響きとして心にプラスに作用するようになったからであると推定できよう。本研究の評価者がバロック期の名曲であるBadinerieを好ましい調べとして受け容れているのは、お囃子音楽「えんぶり」で培った「こころの音楽理論」が形成されていたからに他ならないであろう。

「えんぶり」は今日に至るまで、娯楽も少なく、厳しい天候、気候の中で八戸地方の人々が耐えて生き抜くための心理的資源であったと考えることができよう。江戸や明治期とは時代背景も変わり人々の生活も多様化した現在でも、人々に明るさや活気をもたらす伝統的な民俗芸能であると「えんぶり」を位置づけてみるのがで

きる。それは何よりも現代の若者である八戸地域の大学生がそれにポジティブに関わりを持っていることから言えるように思われる。

「えんぶり」の持つこのようなポジティブな特性は、また、その祭りの形態とも関係しているかもしれない。祭りの形態を整理すると、次の3つの形があることに気づかされる。祭りの多くは、世界の各地によく見られるもので、青森県でよく知られている「青森ねぶた祭り」や「八戸三社大祭」などのように、祭りが移動するタイプの「パレード」の形態を主とするものである。次いで「仙台七夕祭り」に見るように、祭りの出し物はさまざまな場所に固定され、見る側が移動しながら楽しむ「展示」の形態がある。さらに第3には、ミュージカルやオペラのように劇場のような舞台での演技を鑑賞する「劇場」の形態がある。この最後の形態の場合、劇を支える音楽に大きい役割が与えられ、バリエーション豊かな音楽が用意される。「えんぶり」は古来、領主の庭園や舞台で演じられることを主としてきた芸能であり、多くの詞章が用意され唄われている。このことからすると、「えんぶり」は「劇場」型の祭りといえそうである。人々は舞台上で舞う籐九郎たち舞い手の太夫に目を奪われながらも、実はそれを支え奏せられるお囃子音楽の旋律に酔い、明日への活力を生み出してきたのであろう。

なお、本研究にはいくつかの問題点もある。先行研究が見あたらないことから、研究の方法に考慮の余地が残っている。まず、選曲の方法が上げられる。今後の課題としては選択について客観的な基準を検討する必要があるであろう。また、解析の方法にしても項目の背後に潜む潜在的な要因を探るなどの試みをとおして、お囃子音楽の特性をさらに追求する必要があるであろう。

次には、協力者の選択に考慮する余地が残されている。伝統芸能の音楽で得られた結果を我々は地域の人々の心理的特性と関係づけている。そうだとしたら、他の地域の人々には同じ

ような効果は認められないことになるが、果たしてそうであろうか。今後こうした問題についても解明に努める必要があるであろう。

ま と め

八戸市には、国から重要無形民俗文化財の指定を受けている「八戸えんぶり」がある。これは二月中旬に、豊作を願って‘舞台’で行われる祭りであり、起源が18世紀以前といわれる。同時に、この祭りは早い春の到来を待ち望むこの地の人々が長い冬に耐える知恵として練り上げられてきたことが推定できる。祭りでは、主として農作業をめぐる物語を、農作業のしぐさを取り入れた踊りで表現する。その際、祭りを引き立て盛り上げるのが笛や太鼓のお囃子音楽であり、この地で生活する人々に、活気とよここびを与えてきたと考えられる。得られた結果から、「えんぶり」の曲には「明るい」、「動的な」、「陽気な」、「にぎやかな」といったポジティブな評価が高いことが分かった。楽曲3も、「えんぶり」と同様に評価はポジティブな傾向であった。「えんぶり」の2曲と楽曲3のBadinerieは曲間の相関が有意に高いか、その傾向が認められたこと、さらに、変動係数値から推定した得点のばらつき具合も、この3曲はほぼ同様であったことから、「えんぶり」の横笛の響きと「Badinerie」のフルートの音に、息の業としての共通性を示唆することができた。「Badinerie」は、お囃子

音楽「えんぶり」と似た心理的反応を喚起する性質を持っているようである。

参 考 文 献

- 阿部 達 (2001) 八戸の民俗芸能 八戸市：みちのく印刷
- 八戸地方えんぶり連合協議会 (2001) 創立30周年記念誌「えんぶり」 青森コロニー印刷
- 管 千索 (1996) 音楽における情緒的意味の測定と分析、梅本 (編) 音楽心理学の研究 第8章 第1節 pp.224-241. 京都府：ナカニシヤ出版
- 前田りり子 (2006) フルートの肖像—その歴史の変遷— 東京：東京書籍
- 奥田恵二 (1978) フルートの歴史 東京：音楽之友社
- 大久保源太郎 (1987) 糠塚のえんぶり 青森市：青森毎日新聞社印刷局
- Stevens, C. & Byron, T. (2009) Universals in music processing. In S. Hallam, I. Cross, & M. Thaut, *The Oxford Handbook of Music Psychology*. Oxford: OUP, pp. 14-23.
- 正部家種康 (1991) 楓えんぶり読本 八戸市：伊吉書院
- 正部家種康 (1999) 歴史と伝説 はちのへ物語 八戸市：伊吉書院
- 東奥日報社 (編) (1990) 青森県 暮らしの歳時記 青森市：東奥日報社

Psychological effects of Hachinohe Enburi musical accompaniment

Toshiteru HATAYAMA, Michihiko KANACHI, Nobuyuki FUKAZAWA

Abstract

The purpose of this paper was to describe psychological effects of the musical accompaniments for Hachinohe Enburi, designated as a valuable national folk culture activity, upon locals in the Nambu area including Hachinohe city. Then, the present study attempted to analyze verbal images generated by the Enburi music in terms of psychological viewpoints. Forty-four Hachinohe university students participated of 33 men and 11 women from 18 to 21 in age. They were requested to mark on 21 bipolar 7-point rating scales, the point between the two poles which is appropriate for images represented by each one of 21-pairs adjectives. Two pieces of Enburi music were compared with two pieces of Baroque music, “La poula” by Rameau and “Badinerie” by J.S. Bach. The result of Spearman’s coefficient of rank correlation showed that there were highly significant correlation between both of Enburi music. Furthermore we found significant similarity in mean rated scores between Enburi music 1 and Badinerie, and significant tendency between Enburi music 2 and Badinerie. Verbal images caused by the two pieces of Enburi were associated with adjectives such as “dynamic”, “lively”, “cheerful” and that sort of thing: positive assessment. This suggested that the traditional Enburi music has been accepted by the locals as positive since 18th century.

Key words: Hachinohe Enburi, musical bipolar rating scale, flute, style of festival